

若松の城下に、もつと多くの水をひくにはどうしたらよいか、調べよというのだ。」

豊助は、それ以上を語らず、口をつぐんで遠くの空を見つめています。頼母のやしきで家老から直接聞いたことばが、まだ豊助の心にひびいているようでした。

「今まであちこちの用水路づくりや、川の堤防づくりをしてきた者たちはいら。しかし、今度のことは、その程度の経験では間に合わない大工事だ。人の話では、お前はこれまでに二十年の間に、あちこちの用水路や堤防の改修の仕事にあたつてきたということではないか。それだけでなく、いろいろな計算や測量のわざにもすぐれているそうではないか。時間もあまりないことなので、ぜひお前の力をかりたいのだ。」

れんは、夫の自信にみちた目を見あげて、身のひきしまる思いがしました。